

基準5 学生の受け入れ

1. 学生の受け入れ方針及び受け入れ方法

1) 入学者受け入れ方針等

【現状の把握】

本学では、岐阜市立女子短期大学の教育に関する基本目標に掲げる教育理念を沿いつつ、各学科・専攻での理念・目的に応じた入学者受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）を定め、本学が求める学生像を明確化している。その内容は『岐阜市立女子短期大学学生募集要項』、及び本学Webサイト上で公表している。

本学のアドミッション・ポリシーは、資料5-Aのとおりである。

資料5-A アドミッション・ポリシー

本学では「女子に対し一般教養を高め、専門の学術技芸を授けると共に有為な人材を養成する」を教育目標に掲げ、英語英文学科、国際文化学科、食物栄養学科、生活デザイン学科の4学科を設けています。2000年のキャンパス移転にともない、社会のニーズに対応した図書館、情報処理教室・自習室、アリーナ、バリアフリーの講義室、実験・実習室などを完備するとともに、有意義な学生生活を送ることが出来るようにクラブサークル室や食堂・売店などを併設しています。

また、本学における教育体制の特徴として、全学的に学生の個性を活かすために少人数での教育を重視して、教育研究の目標を達成しています。

各学科のアドミッション・ポリシーは、資料5-B、C、D、Eのとおりである。

資料5-B 英語英文学科のアドミッション・ポリシー

英語英文学科は、英語と英米文化に関して理解を深めることで未知なる発想様式に目を開き、国際感覚を養い、異文化コミュニケーション能力を高め、国際社会の一員として活躍できる人材を育成することを目指しています。このような教育方針から本学科学生としておおよそ次のような資質のいずれかをもった人を期待します。

1. 英検2級程度の英語力がある。
2. 英米文化に深い関心がある。
3. 留学経験がある、あるいは留学を希望している。
4. 学習意欲が旺盛で、自立心、責任感がある。

資料5-C 国際文化学科のアドミッション・ポリシー

国際文化学科は、世界の多様な文化や価値観を理解し、言語コミュニケーション能力や情報コミュニケーション能力を身につけ、国際化・情報化した現在の社会において積極的・主体的に活躍できる人材の育成を目的としています。そのために、日本を含めた世界の多様な文化や価値観を学び、相互の差異を理解し、互いに尊重し合うことのできる豊かな国際感覚の育成を目指します。また、国際的な意思疎通と相互理解のために、英語・中国語・韓国語の実践的な語学力・会話能力の育成を行うとともに、母語としての日本語運用能力の向上と、情報化社会に対応するうえで必要なコンピューターの実用能力の向上を目指します。上記のような本学科の教育目標に共感を持ち、積極的かつ主体的にこれらの目標に取り組んでいける人の入学を期待します。

資料5-D 食物栄養学科のアドミッション・ポリシー

食物栄養学科は、栄養や食生活の面から健康を維持・増進させることだけでなく、人体の構造と機能、食品と衛生、各種疾病の予防や食事療法、栄養の指導、給食の運営に至るまでの幅広くきわめて重要な分野を学びます。本学で高度な栄養教育を受け、優秀な栄養士として地域社会において積極的役割を果たせる人材、健康な食生活を企画・実践できる人材を養成します。栄養士には、高度な専門知識・技能のほか、協調性やコミュニケーション力など総合的な能力が必要とされます。本学は、それらを徹底した少人数教育により指導しています。このような教育環境の中で「食」と「健康」のスペシャリストを目指し、社会のために役立ちたいという強い意志と大きな夢を抱いている学生の入学を期待しています。

資料5-E 生活デザイン学科のアドミッション・ポリシー

生活デザイン学科は、人間が生活している空間と、それに関連する事物のデザインを追究する学科です。ファッションデザイン専修（ファッションデザインコース、ファッションビジネスコース）と建築・インテリアデザイン専修、ヴィジュアルデザイン専修から構成されています。

我々が考えるデザインとは「ものづくり」に関わる計画や意匠だけでなく、人間が生きていく上で必要なデザインの思考、智慧・哲学でもあります。本学科では「ものづくり」と「智慧」を習得した「専門性を有する教養人」「教養を有する専門家」の輩出を目指します。本学科では、このような教育目標を理解した上で、基礎的な学力・論理的な思考力を有するとともに、生活デザイン学科で学びたいという強い意志を持っている人の入学を望んでいます。この学びに対する前向きな姿勢が、専門的な知識・技術を修得しようという目的意識の向上につながっていきます。旺盛な意欲と若々しい感性に満ちた学生の入学を期待しています。

【現状の分析・評価】

現在、本学のアドミッション・ポリシーは、本学の教育方針・教育目的を踏まえ、また、学科・専修ごとの教育目標に沿って定められている。学科の独自色が反映し、求める学生像も明確化されているが、大学全体としては統一感が薄いという面がある。

一方運用面では 受験者数もかつてのような高倍率とはいかないものの、一定程度の受験倍率を維持しており、アドミッション・ポリシーに沿った学生を受け入れることが可能となっている。

【改善方策の検討】

本学が求める学生像や選抜方針については、従来も『大学案内』『学生募集要項』及びWebサイト等に記載し公表してきた。平成19年度からは各学科のアドミッション・ポリシーをより明確にした案内や募集要項を作成し、平成20年度に学科の目的を学則に定めている。

今後は、学科の独自色を出しつつ、大学全体としては統一感をもち、時代の変化にも適合した明解なアドミッション・ポリシーとなるよう不断に点検して改善を図っていきたいと考えている。

2) 入学者選抜の仕組み

【現状の把握】

本学では、上記のアドミッション・ポリシーに沿い、学生の受け入れ方法として、「一般入学試験」と「特別選抜試験」を実施している。

「一般選抜試験」は「大学入試センター利用の入学試験」（以下「センター入試」と略記）と、「本学独自入学試験」（以下「独自入試」と略記）の2種の選抜方法からなり、「特別選抜試験」は「推薦入学試験」「推薦入学試験（専門高校）」「A0入学試験」（「アドミッション・オフィス入学試験」、以下「A0入試」と略記）「社会人入学試験」「帰国子女入学試験」「留学生入学試験」の6種の選抜方法からなる。

本学では、公平性の高い入学者の受け入れを実現するため、入学者選抜は入試委員会の全体統括のもと、全学の教職員が一体となって実施している。各入試前には、全教職員による全体会議を開いて、入試業務要領を確認し、入試が万全・円滑に実施できるよう努めている。

入試委員会は、学長、学生部長、附属図書館長、各学科長、及び事務局長の計8名で構成されている。

本学の入学者選抜では、「一般入学試験」は、「平成25年度一般入学試験業務要領」に則って行われている。「特別選抜試験」のうち、「A0入試」は「平成25年度A0入学試験業務要領」、「推薦入試」は、「平成25年度推薦入学試験業務要領」に則り行われている。

入試業務のうち、問題作成は、入試委員会が選出して学長が委嘱した問題作成委員が「独自入試」の国語・英語・数学・実技の入試問題、「推薦入学試験」、「推薦入学試験（専門高校）」と「社会人入学試験」の小論文課題を作成する。入試問題の作成と取り扱いについては、「入学試験問題作題及び入学試験問題取り扱い要領」に従って行っている。

採点は、受験生の氏名等を伏せた状態で行い、採点結果を集計し、合否判定資料を作成している。データ受け渡しも業務要領に従って行い、データの漏洩防止を図っている。

合否の判定は、各学科が合否の原案を作成したものを、入試委員会が審議検討して全学の合否判定案を決定して教授会に提案し、教授会が最終決定している。合格発表は、合格者の受験番号のみを本学の掲示板に掲示するとともに、本学のWebサイトでも合格者の受験番号を掲載している。合格者本人には合格通知を郵送している。

それぞれの入試は、それぞれの入試問題作成委員が丹念に検討して問題を作成しており、過去の入試問題については「問題集」を作成して公表している。受験者は、個人別成績開示請求書により、自分の総合点及び順位を知ることができる。

【現状の分析・評価】

本学の入学者選抜は、入試委員会の統括のもと全学的、組織的な実施体制で行われており、個人的な恣意や過失が入る余地がないように行われている。さらに具体的な実施体制は、「A0入試業務要領」「推薦入試業務要領」「一般入試業務要領」で定められているきめ細かなマニュアルに則って行われ、過失の発生を防止している。また、合否の判定も、学科会議から入試委員会での審議を経て、教授会で判定するという三段階の審議を経て決定しており、十分な公平性が保たれていると評価できる。

【改善方策の検討】

本学の入学者選抜実施体制は、毎年検討がなされており、過失の発生防止、公平性・透明性を確保するしくみは構築されていると考えられるが、今後も見直しを行いつつ、実施体制をさらに整備していくことが必要である。

3) 学生募集方法、入学者選抜方法

【現状の把握】

本学では、アドミッション・ポリシーに沿い、学生の受け入れ方法として、「一般入学試験」2種、「特別選抜試験」6種の選抜方法が実施されている。

「一般入学試験」では、「センター入試」の選抜方法は、『募集要項』に記すとおりに実施している。試験の点数配分や受験科目は、学科ごとのアドミッション・ポリシーに基づいて決定されている。例えば英語英文学科では、「国語」（漢文を除く）と「英語」（リスニングを含む）の2教科2科目に、高等学校における成績を加えた総合力で合否を判定している。「独自入学試験」の選抜方法も、『募集要項』に記すとおりである。「特別選抜試験」のうち「推薦入学試験」においては、各学科の推薦条件を『募集要項』に記している。

「特別選抜試験」では、「推薦入学試験」は地域や高校を限定せずに全国公募であり、小論文、面接、出願書類（調査書、推薦書及び志望理由書）により行っている。また指定校推薦入試制度はない。しかし地元の岐阜県内の高校の進路担当者とは高校訪問を通じて情報交換して次年度の選抜方法の検討に生かしている。

入学者選抜における高大の連携という面では各学科に特色ある取り組みがみられる。国際文化学科では中国語の授業で高大連の取り組みが2年ほど前より始まっている。また生活デザイン学科での授業に、専門高校の教員が生徒を連れて学内見学や授業にゲスト参加する機会もあり、その参加生徒が「AO入学試験」、「推薦入学（専門校）試験」に出願するケースもある。さらに他大学との連携で行っている「高校生のための街なかオープンカレッジ」の取り組みは岐阜県内で地域を変え、毎年行っている。この企画に参加した高校生から、本学の推薦入試等に出願する機会があり、高大連携の取り組みの事例のひとつとなっている。

「特別選抜試験」での小論文及び、面接については、各学科がアドミッション・ポリシーに基づいた独自の方法を工夫して採用している。生活デザイン学科の場合には「推薦入学試験（専門高校）」を実施し、専門分野について高校時代から関心と能力を持っている学生を選抜している。また「社会人入学試験」では社会人入学者は、社会経験を積んでいることや年齢的に一般学生より年長であることからリーダー的存在になることや、また勉学意欲が旺盛であることから他の学生の模範となることが期待されている。留学生（韓国からの留学生）は、課外活動で国際交流を目的としたサークル活動を行っており、異文化交流の面でも活躍している。

「A0入試」は、英語英文学科、国際文化学科、生活デザイン学科が実施しており、それぞれ出願資格を定めて選抜を行っている。「A0入試」説明会の情報も載せたオープンキャンパスの広報ポスターを作成し、公共交通機関等で宣伝に努めている。

入学者選抜の方法は、『募集要項』、本学Webサイトに出願の資格、選抜の方法、推薦の条件等を記載して受験生に周知している。募集要項は岐阜県内の公立・私立全ての高等学校（82校）、及び過去5年間の志願実績のある県外の高等学校（414校）に郵送しているほか、平成25年度の例でいえば、オープンキャンパス（参加者523名）、A0入試説明会参加者（参加者130名）や高等学校における大学説明会（4月以降13回、参加者87名）、業者主催の進学ガイダンス（4月以降9回、参加者80名）、随時実施している本学教員の高等学校進路担当者訪問等の機会に配布・説明を行っている。それ以外でも志願者等からの電話・メールによる問い合わせに答え、また資料請求に対しては送付を行っている。

「A0入試」、「推薦入学試験」により早期に入学者を決定する場合、入学前教育が必要となる場合がある。現在は状況に応じ、個別に対応している。生活デザイン学科では、「A0入試」や「推薦入学試験」での入学決定者に対して、「予備教育課題」と称する課題を課し、合格者に対する入学前教育を行っている。実施の目的は、受験という目的を達成した後の勉学に対するモチベーションの低下防止と、デザインに対する視点を早期から身につけ、入学直後から高い意識を持って学生生活を送ってもらうためである。課題は、2つに分かれている。1つは学科共通の課題で、① 美術館での展示物の鑑賞または本学科卒業研究発表会の視聴と感想、② デザイナー研究、を内容とする。もう1つは専修独自の課題で、制作を中心とした内容である。さらに、予備課題では入学までに読むことが望ましい推薦図書を上げている。前者と後者の課題はそれぞれ提出期限が異なり、高校での学習の妨げにならないことと、入学までの数か月を万遍なく有意義に活用してもらえるよう配慮している。提出された課題は、その後展示閲覧し、評価を添えて学生に返却している。また、入学後の学生指導に活かしている。なお、この対応は、現在は生活デザイン学科のみが実施している。

【現状の分析・評価】

学生募集及び選抜結果に関わる公開、周知については、広く様々な機会・媒体によってなされている。ただ、大学予算において広告宣伝費が十分でないことから、オープンキャンパス等の宣伝情報発信力が低いことは課題である。

入試志願者数の状況については、平成22年度入試の786名、平成23年度入試の719名から、平成24年度入試が562名と急な減少をみたが、平成25年度入試では681名と回復の兆しを見せている。そういう中でも過去5年間の志願倍率（志願者数／募集定員）は3,34倍（平成21年度）、3,42倍（平成22年度）、3,13倍（平成23年度）、2,44倍（平成24年度）、2,96倍（平成25年度）となり、全国的な水準以上は確保できている。入試区分別の志願倍率（志願者数／募集定員）、受験倍率（受験者数／募集定員）、合格倍率（受験者数／合格者数）については、「入学者選抜状況」（別添資料）に示す。

【改善方策の検討】

今後も、学生募集全般にわたる検証を行い、改善を進めていく必要がある。特に大学内の予算で広告宣伝費の確保にも努め、学生募集全般に関わる宣伝情報発信力を高めていくことが必要である。

過去5年間の志願者数の推移では平成24年に急な減少をみたが、平成25年度に回復の兆しを見せ、今年度はさらにオープンキャンパス参加者が過去最高になり、志願者数も前年並みになっている。その流れを志願者数確保につながるよう進めていくことが必要である。

2. 学生収容定員と在籍学生数の適正化

1) 定員管理

【現状の把握】

本学の入学定員は、全体で230名である。学科ごとの「学生定員及び在籍学生数」に資料5-Fに示すとおりである。

資料5-F 学生定員及び在籍学生数（平成26年3月現在）

	英語英文 学科	国際文化 学科	食物栄養 学科	生活デザイン 学科	合計 (人)
定員 (人)	50	60	60	60	230
1年学生数 (人)	53	76	62	68	259
2年学生数 (人)	55	60	64	69	248
合計 (人)	108	136	126	137	507
総定員 (人)	100	120	120	120	460
充足率 (%)	108.0	113.3	105.0	114.2	110.2

※充足率は総定員に対する在籍学生数合計の割合

毎年定員を1割程度上回る学生を受け入れている。この人数は、講義はもちろん、実験や実習、実技、情報演習など教育上の支障にならない枠内で、学内で合意している人数である。「一般選抜試験」の合格発表に際しては、入学辞退者数をできる限り正確に予想するために、過去の定着率などを参考にして合格者数を決めている。そして当初の合格者数を絞って決定しているが、辞退者が多い場合は、追加合格を出して学内合意の人数までを確保している。そのため教育に支障が出るような入学者を受け入れるという事態は起っていない。

【現状の分析・評価】

「入学者選抜状況」（別添資料）にみるように、ごく一部を除いて、ここ5年間に定員を大幅に超えたり、あるいは下回ったりする状況にはなっていない。各学科において、受験者の入試成績、高校成績、定着率のデータを蓄積しており、その分析から適正な入学者数を維持している。また、入試方法についても受験生の動向を分析し、改善してきており、入学定員と実入学者数との関係は適正化が十分図られているといえる。食物栄養学科では、定員の1割程度上回った入学者を受け入れてきたが、平成23年度の厚労省の訪問調査において定員の厳格な厳守を指摘され、それ以降は改善の努力をしているところである。

本学では、一定の志願者倍率及び受験者倍率が維持されており、アドミッション・ポリシーに沿った学生を受け入れているといえる。「独自入試」をはじめ、「センター入試」「推薦入試」「AO入試」等多様な入学者選抜方法を実施して、受験生の学力だけでなく、やる気や技能、経験など多様な能力を知り、学科への適合性を見出している。

【改善方策の検討】

入学者が定員を上回るとは、学生の教育環境に悪い影響を与える可能性もあり、特に食物栄養学科や生活デザイン学科は設備面からも課題が残る。止むを得ない場合を除き、適正な在籍学生数とするよう、過去の入学実績から入学辞退者数を精査するなど、不断の努力が必要と考えている。

2) 退学者

【現状の把握】

過去8年間の退学者数の推移は資料5-Gに示すとおりである。

資料5-G 退学者数の推移

年度	英語英文 学科	国際文化 学科	食物栄養 学科	生活デザイン 学科	合計 (人)	割合 (%)
平成 18 年度	4	1	2	6	13	2.5
平成 19 年度	0	1	0	4	5	0.9
平成 20 年度	0	1	1	3	5	0.9
平成 21 年度	1	1	0	2	4	0.8
平成 22 年度	0	1	0	2	3	0.6
平成 23 年度	2	3	0	4	9	1.8
平成 24 年度	3	0	0	3	6	1.1
平成 25 年度	0	3	0	10	13	2.5

※割合は在籍学生数合計に対する退学者数合計の割合

在学生全体から見れば1%程度で推移する年が多く、退学者の割合は低いといえる。しかし平成25年度は13人(2.5%)と増え、特に1学科に集中する傾向となっている。

退学の理由については、病気療養、進路変更に加え、近年経済的な困窮が原因となる場合が見受けられる。病気療養については精神的な悩みなどが理由となる場合が多い。精神的な悩みや医療的な問題などについては、学内の保健室や専門の相談員による学生相談室も含めて連携して対応している。同時に、学科の会議においても取り上げ日常的にケアや指導を行っている。一方、経済的な困窮については、従来十分でなかった授業料の減免について今年度から規程を改め、支援体制の拡充に努めている、また奨学金の申請なども含めた相談に乗るようにしている。

退学及び休学については、本人からの申し出や聞き取りなどを通して十分に把握するとともに、必要に応じて保護者との懇談なども行っている。さらに、各学科や各委員会において状況を把握し、検討を経た後に必要な手続きを進めている。

【現状の分析・評価】

数としては少ないにしても、毎年退学者が出ることは残念なことである。本学としては入学した学生は、全員が目的を達成して卒業していくことを目標にする。そのためには、日々の学生へのきめ細やかな対応や指導が欠かせない状況となっている。そのため本学では、次のような学生相談体制をとっている。

日常的には、全教員が週1回のオフィス・アワーの時間を設定し、学生の相談に対応している。またゼミや個別相談など、学科単位での対応など、日常的にきめ細かい対応を積み重ねている。

全学的にも大学や友人、学習・研究への適応を図る活動を重視している。5月の新入生歓迎行事、10月の大学祭である桃林祭などもこれに役立てて実施している。全学での組織的な対応としては、教務委員会及び厚生委員会を軸とした対応が行われている。また、専門の医師や臨床心理士が相談にのる学生相談室を設けているほか、保健室でも日常的に相談に応じており、教員、学科、全学で、退学、休学者への組織的取り組みは構築されていると考える。

ただ、生活デザイン学科の平成25年度の退学者が急増している点は、原因の解明を含め、十分な対策を講じる必要があるとなっている。

【改善方策の検討】

今後の一層の充実対応の方向として、まず退学・休学者が出ないよう予防するとともに、欠席がちな学生や勉強意欲が十分でない学生に対しては、原因の解明から始まり、一人ひとりにきめ細やかな対応を心がけるとともに、関係者や機関が連携した組織的な対応を進めていく。更に、教職員が学生の抱える問題やその対応に向けた理解や知識、技術を高めることが重要になるので、FD研修やSD研修などを通じて、そのような内容の研修の実施を行っていく。